



1988年(昭和63年)
6月号(No. 516)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

TV実況中継の教えるもの	大塚博美	(1)
海外の山		(2)
「パリのパフォーマンス」		
「アルプス、20世紀前半と後半」		
シンポジウム		
「危険な動物と安全登山」		(2)
図書紹介		(6)
「世界の山稜」ほか		
自然保護随想		(7)
三国登山会募金応募者ご芳名		(8)
東西南北		(9)
桑原さん追想	藤平正夫	(10)
追悼	谷博さん 四手井靖彦	(10)
茶谷先輩を偲ぶ	岡村治信	(11)
報告	総務委員会・集会委員会	(11)
望月達夫文庫目録(続き)		(12)
会務報告		(13)
新入会員・住所等変更		(14)
ルーム日誌		(15)
お知らせ		(15)

科学研究委員会

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテラップ電話

234 六六五九

ヒマラヤ登山

TV実況中継の教えるもの

三国友好登山隊・副総隊長

大塚 博 美

遂に、世界最高峰チョモランマの北東稜から山頂にかけて、その登攀活動の一部が生中継によって、世界各国に紹介された。

まさにTV新時代到来というべきである。

五月五日、アタックの日。天気晴朗なれど、風強し。午前六時三十分(北京時間、太陽時間というと午前三時、真っ暗である)。

「一度テントを出たがブリザード厳しく引き返す」とトランシーバーから緊迫した山田隊員の声がひびく。

今日の日に賭けたヴェテランの山田

隊員も緊張きみである。

午前八時四十三分、モニター画像に人が動き出した。TV三〇〇〇の超望遠レンズが最大限のアップで稜線上のキノコ岩の傍、黄色いテント二張と、人間の動きをとらえている。八六〇〇の超高所の登攀行動の実況生中継である。指揮部のテントのモニターを見詰める隊員達の間にも軽いどよめきが流れる。

素早い動きで第二ステップの岩壁基部に移動していく。超高所とも思えぬ敏速な動きである。

多分、会員、関係者、そして日本の

多くの茶の間の人々は、第二ステップに取り付けられた(七五年中国隊のとき)ジュラルミンの梯子を登る隊員の様子を息をのんで、見詰めていたことであろう。

そして第二ステップを抜け、稜線沿いに三角雪田、そして頂上への緩い雪面へと、信じられないスピードと迫力で、つまり、見ていて極めて安定感のある動きで、ツェリン・ドルジ、アン・ラクバ、山田昇らは次々と山頂に達した。正に十二時四十五分、C2を出発して約四時間である。

この間、サポートの山本(宗)ら三人と撮影隊の中村ら三人も必死になつて縦走隊を追う画像も、交互に切り換えられ放映されたが、スピードが全然違う。

遂に世界のトップクラスの登攀行動をTVが生映像で捉えたわけであ

ルを指して下山して行った。

『スピードを保持しつづけることが安全の第一歩』とよくいわれるヒマラヤ超高所の登攀の原則の一端を山田隊員らは、生映像で証明してくれた。登山者も他の競技のアスリート達と同様に、もう偽ものは通用しない時代となった。高いレベルの登攀能力を持った者のみが、高度を一段一段とクリアして確実に頂上に到達する。そこは、鍛えられた肉体と経験しか通用しない非情の世界である。

テントを出ると大空にチョモランマの北面の偉容がどっしりと目の前にある。あの稜線、あの第二ステップだなーと指呼することが出来る。あの頂に登り抜けた山田縦走隊、唯ただ畏敬あるのみ。それにしても日本人クライマーのスピードの遅さは一体どうしたことであろうか。

生のTV画像が私に与えたショックの一端である。

多くの会員、関係者の皆様、そして活動した三国の隊員、本場に皆さんのご支援と協力によって、二〇〇%の成功に恵まれました。私が当初から、「ラクダの背に揺られながら針の穴に糸を通すようなタイミングの難しさ」と言っていた三つの目的が一度に成就しました。出来すぎだと幸運を呪っていますが、何ものかに感謝する気持ち一杯です。有難うございました。紙上を借り取敢えずお礼申し上げます。(B Cにて)

シンポジウム

「危険な動物と

安全登山」

科学研究委員会

一九八八年四月十六日(土)

十三時半—十七時

日本山岳会ルームにて

科学研究委員会主催、または共催のシンポジウムは年一回開く恒例になっていたが、一九八七年度は準備の都合上、本年四月に開かれた。

今回は国内外の旅行、登山に際して遭遇する危険動物の生態、事故予防対策、救急処置などについて七人の講師の方からお話を伺うことができた。

海外の山

パリのパーフォーマンス

パリに行ったのは、五月である。ソ連を別にすれば初めてのヨーロッパで、無論金がないとか仕事の縁がなかったのがその理由だが、ついでにアジアが極地にしか魅かれなかった自分の料簡の狭さについても改めて考えさせられた。

モンゴル高原、ソ連の北極圏を旅してきた後の「花のパリ」入りだったから何と見られるもの聞くもの全て感激の対象だったが、とりわけ地下鉄の通路や車内で楽器を奏でたり歌ったりの街の音楽家たちのパーフォーマンスには脱帽であった。

「ダンス・エスカレード」なるパーフォーマンスがあり、そのコンテストも開かれているという話は、駅の本屋で買った山の雑誌「モンターニュ」で知った。「登攀舞踊」とでも訳すのだろうか、ガイド欄に出ている紹介記事はこんな具合だ。

「イザベル・パルトニッキは舞踊家、ハヴィエル・グロリュはクライマーである。二人は六カ月前に『騒乱』という名のチームを作り、その出し物『トラヴァース』はヴォ・アン・ヴランのフェスティバルで一位を獲得した。『トラヴァース』は、大地、壁、空気が一つにとけあった三次元の新しい空間での二人の出会いを表現するものだ。」

記事と並んで人工の壁を片手に抱きかかえて攀じ登る男の写真が掲載されているのでこのパーフォーマンスの大体の雰囲気わかる。熟練クライマーが踊り手と組んで創造した新たな表現のジャンルなのである。た

だ、それを演じるには、舞台が要る。地方自治体など演技に必要な人工壁作りのスポンサーを二人は捜している、と案内記事は結んでいた。

岩登りのヘタな私など到底思い及ばぬことであるが、優れたクライマーあるいはボルダーともなると確かにそのしなやかな動き、瞬発の力などは第三者にも充分見る価値がある。ただ、まかり間違ったら一巻の終わりのいうこともあって、過去クライマーたちはもっぱら静かな場所、で、岸壁の孤独を楽しむことにより情熱を持った。

カラフルな登攀衣装に象徴されるように今は、少し違う。例えば、今年一月三十日にパリのベルシーにある有名なスタジアム、パレ・オムニスポールで催された国際室内クライミング・コンペは二十年前だったら考えられなかったイベントである。「岩と雪」六月号にその写真と紹介記事がのっているが、なにしろ高さ十九・五メートル人工壁をよじるクライマーを六千人の観客が見守ったというのだ。

世界を代表する男女クライマーが集うこうしたコンペは、都会でいながらに見られる新しいショーとしてこれからもっと一般化するかもしれない。あるいは新し好みのテレビ人達が日本でも早速やってみようと思うかもしれない。登山の世界はいろいろな意味で変質しつつあると思うが、こうしたパーフォーマンス化の傾向はさらに強まるのではないか。

世界最高峰のてっぺんからテレビの生中継が成功した、という話をパリでフランス人から聞いた。中村進カメランの頑張りを感じ、同時にまだやっていなかったショーの一つがこれで終わった、との感慨を持った。

(江本嘉伸)

ダニの話 国立科学博物館動物研究部

浅沼 靖

ツツガムシの話 千葉県衛生研究所長

太田原美作雄

寄生虫の話—登山時に考慮しておくべき寄生虫疾患

国立予防衛生研究所

影井 昇

昆虫とヒル—南方の四難敵と北方のもう一つ

元三井金属鉱業KK取締役

塩原幹治

へびの話 元国立予防衛生研究所

近藤 了

クマの話 東京大学名誉教授

中村純二

マラリアについて

国立佐倉病院

浜口欣一

まず多忙のなか時間を割いて、興味ある、有用なお話をして下さった講師の方々にお礼を上げたい。

以下要約を当日話された順序によらず、圧縮した形で記す。なお、当日使用された予稿集入手希望の方は本委員会宛誌代五百円十郵送料一七〇円計六七〇円(切手も可)送って頂ければお送りします。

浅沼靖氏と太田美作雄氏からはダニ

海外の山

アルプス—20世紀、前半と後半

近藤 等

「スイス—山案内人の手帳より」岡澤祐吉著は、今世紀前半、とくに一九二〇年代と三〇年代にアルプスを訪れたJ・A・Cの先輩たちがどのようなピークをどのようなルートから登ったかをリスト・アップした労作で、大変興味深く読んだが、この本についてはすでに会報五二二号で田口二郎氏が適切な書評をしておられるので、重複は避ける。

去る二月十六日、この本の出版記念会が催されたが、この席上、わたしがお祝いの言葉につづいて、当時登られたアルプスの山と現在登られている山とその登り方についての比較を少々述べたところ、数日後、田口さんから電話があり、君が話したことは大変面白いから会報に書け、というお言葉をいただいたので、そのアウトラインについて記してみたい。

まず一九二〇年代から三〇年代にかけて登られたのはもっぱらスイス・アルプスで、主なピークはベルナー・オーバーランツのユングフラウ、メンヒ、フィンスター・アールホルン、ヴェッターホルン、シュレックホルン、アイガー、ワリスのマッターホルン。いずれもスイスの名峰であり、スイスのガイドたちが当時の日本人登山者を自国の名峰に案内したのは当然で、フランス・アルプスに遠出しなかった理由も分かる。

ところで今世紀後半、アルプスに出かける日本人登山者が登るピークは、前半に登られたピークのうち、ごく限られている。わたしは一九六二年くらい、スイス・アルプスのピークは四〇峰ほど登ったが、山行中、他の日

本人パーティに出会ったことは一度もない。では、日本人はこの山に行っているのかというと、90%はフランスのモン・ブラン山群だ(毎年シャモニで山岳保険の—SOSモンターニュ—に加入する日本人は約一五〇名もいる)。

なぜモン・ブラン山群に人気があるのかを一言で説明すると、岩、氷、ミックスと、技術的に面白いルートが無数にあるからだ。スイス・アルプスは頂上に登ることを目的にした登山が行なわれる山、フランスのモン・ブラン山群はルートを登ることそのものを目的にした登山対象として面白いからであり、テクニクに大きなウェイトを置く現代のクライマーの好みに合致しているからと言える。

いずれにしても、アルプスの各山群にはそれぞれの個性とよさがあるから、なるべく多くの山群で登山を楽しむのが理想的だ。

スイス・アルプスで、以前と同じように現在も日本人が夏ごとに登っているのはメンヒとユングフラウで、はじめてアルプスを登る者に好適なやさしいピークだ。

アイガーもひとときよく登られた。とくに北壁は一九六五年に高田光政君が日本人としてはじめて完登して以来人気が出て、その後十五年間ほどのうち、夏、冬を通じてこの壁を登った者は三十名以上に達するだろう。

北壁は今夏、初登攀五十周年を迎えるが、初登時のルートを中心に現在十四本のルートが開拓されている。北壁からミッテレギ山稜との中間に岩と氷雪のすばらしいミックス・ルートの北東壁があるが、日本人はまだ誰も登っていない。

ミッテレギ山稜は一九二一年の横さんの初登攀以来、戦前に十名ほど登ったが、戦後は一九六〇年代後半から七〇年代の終り頃までよく登られた。わたしも一九

海外の山

とツツガムシ(ダニの一種)のお話があった。ダニ類は二万種もあるが、人間に害を及ぼすものは少数である。マダニ類は哺乳動物、鳥類に寄生しているものが人間につくが、マダニのもつ病原体から起る病気には野兔病、ライム病があり、後者は最近関東、中部地方に発生がみられる。

ツツガムシは信濃川、阿賀野川、最上川、雄物川の特定河川敷で古くから発生が知られているが、これはアカツツガムシで、盛夏がふ化期で、アカツツガムシ媒介性恙虫病を起こすが、近年アジア各地、豪州に非アカツツガムシ媒介性恙虫病が広く見出され、日本でも河川に関係なく、各地で発病が報告されている。アカツツガムシのふ化期は盛夏なのに対して、フトゲツツガムシは四月と九月十一月の二回、タテツツガムシは秋・冬である。林や草原にいたので、土や草の上に腰をおろさないこと、肌を露出させないことが予防対策であるといわれるが、事実上これは難しい。咬まれて発熱、発疹がでたら医師にかかること。現在は早期に治療すれば怖い病気ではない。

影井昇氏は寄生虫について話された。海外遠征の登山の前段階でかかる可能性のある寄生虫病は極めて多く、事前に通過地域の寄生虫病の流行

山七〇年の夏、佐藤久一朗氏を中心に十一名の仲間といくつものパーティを組んで登った。眺めのすばらしい快適な稜線コースだった。

オーバーラントの最高峰はフィンスタールホルンで、昔、グリンデルワルトを訪れた日本の登山者の大半の人が登っているが、最近登る人はごく希だ。ユングフラウヨッホから小屋までのアプローチが長く一日がかりなので敬遠されているらしいが、五年前に中野融君と一緒に登ったときは、雪が凍結していて、長いアプローチも苦にはならなかった。

二〇年代から四〇年代にかけてよく登られにヴェッターホルンを登る者も現在はすくない。グリンデルワルトの谷から眺めると、実にほれほれとした山容をしているが、グレクシュタインの小屋から見上げると、あまり登高欲はそそられない。山頂からの眺めは抜群だが。

現在、オーバーラントの山に登りにやってくる日本の登山者は、やさしいユングフラウとメンヒに登る人たちにほとんど限られている。なぜなら、ハイ・レベルのクライムを実行する者にとって、さんざん登られたアイガーワントの偉光は消え失せてしまったからであり、オーバーラントの岩質(ワリスもそうだが)はモン・ブラン山群の花崗岩にくらべて、快適な登攀を提供しないからだ。たしかにフィンスタールホルン山頂から見下ろした北東壁、ラウターブルンネン・ブライトホルン山頂から見下ろした北壁、グスパルテンホルン山頂から見下ろした北壁の岩質は登高欲をそそられるようなものではなかった。

しかし、すばらしい例外もある。がっちりした石灰岩で構築されたヴェッターホルンの北東柱状岩稜や一九七〇年に初登された西柱状岩稜ダイレクトなどのフリー・クライムは最高水準の登攀対象だし、グリムゼル峠周辺

のエルドラド・ドームやハンドエックのスラブはハード・フリー・クライマーの天国だ。

ワリスで昔も今も日本人が多く登っているのはマッターホルンだ。二〇年代から三〇年代にかけてはスイス側からヘルンリ稜を登り、イタリア稜を下降する山行がかなり行なわれたが、現在はヘルンリ稜往復がほとんどだ。またツムット稜を登るパーティもいなくなった。

一九六五年夏に芳野満彦、渡部恒明のペアが日本人として北壁をはじめて登って以来、一九七〇年代末にかけて多数の者が登ったが、その一方、山のコンディショニングと天候無視、技術不足を原因としたアクシデントが多発し、これまでヘルンリ稜の下降と北壁(イタリア稜では一組二名)で遭難死した日本人は二十名以上に達しているのは残念なことである。鳴秋子さんが北壁の冬期女性初登攀者になったのは、いまから十年前の一九七八年三月のことだ。

マッターホルン以上に現在よく登られているのが、クライン・マッターホルンのロープウェイが通じるようになっていらい、ブライトホルンだ。いずれにしても、今世紀前半と後半を比較してみると、スイス・アルプスに関する限り、前半のほうがピークのバラエティに富んでいるようだ。後半になると登山者はフランスのモン・ブラン山群に集中し、大ルートの90%は夏、冬を通して登られ、いくつもの初登攀も樹立された。

前半の登山者たちがグリンデルワルトやツェルマットのガイドに暖く迎えられたように、後半のクライマーたちの活躍はシャモニの人たちから高く評価され、現在に至っている。

ところでここ数年前から登山者の傾向に変化が見えてきた。以前、シャモニにやってくるのはハングリーな先鋭的クライマーが大半だったのにくらべて、いまはその海外の山

状況を把握しておくことが望ましい。主な寄生虫病としては、(a) 節足動物媒介のものとして各種マラリア(後述)、フィラリア病、(b) 貝類媒介、(c) 土壌伝播、(d) 食品媒介などのものがある。それぞれ徒歩や水あびを避ける、素足で歩かない。生水を飲んで、生食をしないなどの、予防の配慮が必要である。マラリアについては理事の浜口欣一氏から詳しいお話があり、最近非規則的に発熱する熱帯マラリアに海外で感染するものが増えていること。予防には蚊にさされないこと、発病したら速やかに医師にかかることが必要である。

塩原幹治氏は長年にわたるフィリピン、アラスカでの経験を話された。マラリア、フィラリアは蚊にさされないよう蚊帳の使用、モスキートルペラの塗布をする。ジストマはカタツムリに寄生して水中に放出されるので、徒歩には長靴の使用が望ましい。蛭に対しては防虫ルペランとして、カッター(米国製)というクリーム状塗布剤が有効である。

近藤了氏からはヘビの話をついた。地球上に現在棲息する二千三百種のうち毒蛇は約四百種で、溝牙蛇科、蝮蛇科、蝮蛇科に分類される。神経毒、血液循環障害、出血、その他の酵素作用がある。咬まれた時は傷口の上部を余

海外の山数は減り、一般登山者(シャモニでモン・ブラン、ツェルマットでマッターホルン。グリンデルワルトでメンヒとユングフラウを登ればよいと思う人)が増加していることだ。またもうひとつの傾向として、小川山や城ヶ崎の延長として、ピークの頂上に登るのが目標ではなく、ハード・フリーの岩登りを楽しみにやってくる人たちがいる。

ヨーロッパ全体について言えることは、クラシックな山行をしている人はあいかわらず多いが、その一方、二十年前にくらべて登山者の技術的なレベルが非常に高くなったことだ。ボルダリングにはじまる岩登りが非常に盛んになり(フランス山岳会でも毎週ボルダリングや岩登りの集会所で開かれている)、その結果、岩登りを登頂のための手段ではなく、岩登りそのものを目的として楽しむ人が増加した。このように一年中、ボルダリングに熱中している人たちがいる一方、アルプスでは岩登りの技術的な難しさを探求し、最少限の用具でこれを解決する方向がある。ピトン、あぶみ、ナッツ、フレンズなどの用具は登高用に使用されるのではなく、安全確保のためのプロテクション用にだけ使用される。グラン・カピュサンの東壁や、ドリユのアメリカン・ディレチシマなどの人工ルートは新しいトレーニング法で腕を磨いた人たちによってフリーのルートになってきた。

今世紀前半の人たちは登頂のよろこびに精神的な満足感を味わってきたが、新人類は困難な人間能力の限界に近い岩場を軽快な動作でフリーで登りきる肉体の躍動にスポーツ的なよろこびを見出している。従って登頂が目的ではなく、登攀そのものが目的だから、登って面白い部分が終れば、頂上までは行かないで懸垂の連続で下降してしまう。服装も変り、派手になり、多色のタイツをはき、靴はフラットなラバソールに代った。

アイス・クライムも同じことで、出歯のアイゼン、ピックが昔のものとは逆にそり返ったピッケルの出現によって、ゲレンデで練習することで垂直の氷壁も駆け登れるようになった。こうしてゲレンデだけで岩や氷を楽しむ者が増加したが、ゲレンデで熟練しておくことは、さらに大がかりな登攀を実現させるためになおさらにできない最高のトレーニングであり、オールラウンドのアルピニストになるための大切なステップであることも事実だ。

こうしたトレーニングで二十年前には想像もつかなかったハイ・レベルのテクニクを身につけたことを実証したクライマーの好例がフランスのクリストフ・プロフイダ。昨年の冬、彼はグランド・ジョラス、マッターホルン、アイガーの三大北壁を四〇時間五四分で連続登攀している。移動はヘリコプター、下降はパラグライダーを使用しているが、そのスピードには驚嘆する。

もう一人、エリック・エスコフィエの例をみると、ボルダリングからアルプスを経て、ヒマラヤまで「より軽く、より速く」登ることを実行し、今後の登山傾向を実証している。八五年、ガッシャブルムI峰北稜を単独二時間、同II峰を同じく単独、K2を南東稜から二日半で登頂している。

さらにブノワ・シャハは八六年、ブロード・ピークを一六時間、K2を二三時間、昨年はナンガ・パルバットを二四時間という短時間で登頂している。ヒマラヤもアルパイン・スタイルが定着してきたようだ。

パラグライダーを使用する下降法は今後世界中の山で次第に増加するだろう。これに先立ち、アルプスでは氷壁や氷のクローワールのスキー滑降もその極限に達し、今世紀前半には登るのがやっとだったルートの大半も滑降された。

海外の山

り強く縛り、毒液を口で吸いだす。小切開して洗浄するなどの応急処置をし、一刻も早く咬まれた毒蛇に対応した血清を注射する。治療血清は毒蛇の種類によって異なり、それぞれの国でしか製造していないので、あらかじめ連絡をとって血清を携行するのが望ましい。咬まれた毒蛇の種類を確認して医師に告げることが必要である。

クマの話は委員の中村純二氏が話された。本州のニホンツキノワグマ、北海道のエゾヒグマのうち前者は減少傾向にある。エゾヒグマは生息数約二千八百頭と推定され針葉樹林帯に棲むが、夏は蚊や蛇をさけ山に登る。数メートル数十メートルの厳重な縄ばりをもつ。雑食性であるが、一度味を覚えると同じものを好み、人食い熊は人間ばかりを狙う。視力は鈍いが、聴力、嗅覚は鋭い、熊対策としては熊の生存圏に入ることはなるべく避ける。音を出して人間の存在を知らせる。食料、残飯などを絶対に残さないことなど。今後の対策としては学術調査、保護区を設定して、住みわけを行なうなどが考えられる。

最後に若干の質疑応答のあと、松丸委員長の開会の辞があり、六時近くに終了した。

参会者(順不同) 祖父川精治、滝沢ちよ子、高部正夫、岩井えみ子、斉藤

山 このようにアルピニズムは多様化の一端をたどっている。大事なことは自分がやっていないことに熱中して、海外の他人のやっていることも理解し、できることなら自分もやってみることだろう。登山の傾向も時代に依じて変

化し、内容が細分化するのも当然のことである。一時は批判の多かった岩登り競技会も次第に定着し、近くU・I・A・A主催のワールド・カップや世界選手権大会も開催される運びになった。

海外の山

桂、内藤勇、中谷充、坂倉登喜子、関本俊雄、横田春雄、橋本行雄、関清、大塚玲子、鳥居亮、高田知典、小川隆、林栄二、川俣俊一、南川金一、丸茂キクエ、里見清子、久保孝一郎、岸栄、山本一彦、柏原嘉子、穴田雪江、遠藤光男、渡辺富士子、沼倉寛二郎、二木久夫、北野忠彦、三尾竜臣、河合文恒、恵秀彦、藤谷和正、石井恵美子、岡野修、奥野玲子、南井英弘、奥野道治、鈴木嶋夫、山田哲郎、赤松光、石田要久、石川弘、川合慶子、三栖寿生、小林岳彦、太田敬、板垣望、小松原一郎、広羽清、橋本雅子、入沢郁夫、H. Solomon、中村あや、新関紀和子、高橋詢、高遠宏、松丸秀夫(高橋詢)

お願い

図書紹介執筆者を募る

図書紹介の執筆をお願いできる方を捜しています(和書、洋書とも)。希望者は当委員会あてにその旨を記し、希望する分野を書き添え申し出て下さい。

会報編集委員会



図書紹介

世界の山稜

風見武秀写真集

世界の「山稜」というより、「秀峰」の山岳美を十分に堪能させてくれる写真集である。

著者風見武秀氏について、あらためて紹介するまでもないが、会員であり、また三年前、写真家として叙勲の栄に浴され、しかも、いまでも一年の半分は世界の山と自然に被写体を求め駆けめぐっている。まったく老いを知らない現役の山岳写真家である。

今回出版された写真集は、五年前刊

行した「世界の秀峰」にあらたに訪れたチベット、パミール高原、ヨーロッパ・アルプス、カナディアン・ロッキーズ、アラスカ、ニュージーランドなどで撮影した作品を加え八二点にまとめたもの。とくにヨーロッパ・アルプスは二二回に及ぶという。それだけに多彩な内容である。

いずれの作品も端正な構図のなか、山々のもつ多様な表情を美しく捉え山岳写真愛好者を魅了させてくれる。

風見氏は、昭和のなかばから本格的に山岳写真を撮りはじめ、とくに海外の山の撮影は、昭和三十三年、作家深田久弥氏らとヒマラヤ山行以来こんにちまで三十有余年。その間、休む年もなく撮り続け、訪ねた国は七十五カ国に及ぶという。

自らを「山の巡礼者」と呼ぶ風見氏は「未知を求めて遠く旅する者に、神はそのパラダイスを開く」というコーランの一節を座右の銘にしている。

今年もさげんで会いましょう

世界の山は広い。そして山々はみな個性があり、豊かな風格がある。「世界の山稜」との出会いを求め、さらに撮影の巡礼を続けてゆくことであろう。そして現在、日本山岳写真協会の会長の任にあつて、若い山岳カメラマンを指導するなど、その行動力に敬意を表したい。

一九八七年二月、グラフィック社刊、B4判変形横型、八六ページ、二九〇〇円

(羽田栄治)

本多勝一氏の著書三冊

五十歳から再開した山歩きの記事が、本多勝一氏の著として、一年間のうちに三冊出版された(「五〇歳から再開した山歩き」(朝日新聞社・一九八七年十月)、「山とスキーとジャングル」(山と溪谷社・一九八七年十二月)、「山登りは道草くいながら」(実業の日本社・一九八八年一月)。出版元がそれぞれ違いながら、まったく同じ装丁である。珍らしい出版方法といえる。新聞や雑誌に掲載された山に関する紀行文を、登った日どりの順に収録したものだろう。記者として、取材をかねたものも含まれてはいるが、知命の齢と自称するわりには、精力的に

《自然保護随想》

林道の終点で

総理府が五月一日に発表した『環境問題に関する世論調査』によると、国民の三人に二人は環境問題に関心を持っている、という。この調査は今年一月、全国三千人の成人を対象にアンケート調査を実施した結果を集計、推定したもの。

例えば地球規模の環境問題では、オゾン層を破壊するというフロンガスについて『大変心配』している人が二九・二%、『ある程度心配』と答えた人が三八・三%、合わせて六七・五%。『野生動物の種類の減少』『酸性雨による森林の枯死』については七〇・七四%の人が不安を抱いているという。

こうした国民の環境問題への関心の高まりが、環境浄化や自然保護の面で、政治や行政に反映されることを望むものであるが、逆に三人に一人が環境問題に無関心というのも困った存在だ。

山を歩いている。

資料と取材をもとに、記者としての厳しい目が随所にみられ、歯切れのよい文章によって、いつのまにか、現地にひきずり込まれてしまう。それは、著者の山や冒険の旅の体験が、たて糸として重要な役割を果たしているためなのだろう。

自然や人間に対しての、地球的な発想からなる批評は、ある時は厳しく、

近頃、煙草を吸う人は肩身の狭い思いをしていると思うが、それでも吸殻を無難作にポイと捨てる人は相変わらず多い。これがマイカー族だと行動範囲が広がるだけになお始末が悪い。

渋滞する道路で車の灰皿を掃除して吸殻を道ばたにまき散らす、という光景はよく見かけるところだが、林道の終点の吸殻の山ほど腹立たしい風景は少ない。

登山口のバス停から先にも、マイカーだけ入れる林道というのは、いくつもある。歩いている登山者にとつて林道を走ってくるマイカーというのは、それだけでも、わずらわしい存在だが、山菜の季節ともなると、林道の終点には十台以上のマイカーが駐車していて、よくみると、新しいのや雨ざらしの吸殻の山が、あちらにも、こちらにも散らばっている。

マイカー族が車の灰皿を掃除した無残な痕跡というわけだが、ゴミ収集車も来るわけではないので、どういつもりなのか理解に苦しむ。せめて奇特なマイカー族の方。この吸殻の山を掃除して都会に持ち帰ってもらえないだろうか……。

(関塚貞亨)

また、ある場面ではやさしさをもって語られている。

個人的感情が入らない、記者独特の表現の中で、動物好きの次男との山の中での会話に、「オヤジ」としての秘めたる喜びが感じられ、ほほえましい。

次代に残そう美しい山と溪

だが、そのもどかしさこそ、知命の齢を意識した老いともいえなくはない。

あせらず、じっくりと絵を描き、説得力のある文章で、今後とも読者を楽しませてほしいものだ。

著者のスケッチ、油絵が豊富に掲載され、一八〇〇円としては、ぜいたくで楽しい山の絵本ともいえる。

(小倉童子)

報告書二冊

『ヒマルチュリ 七八九三m 日本大
学ヒマルチュリ登山隊 一九八六』

三国合同登山関係

三国友好合同登山会募金応募者「芳名
(五月十五日現在、一口五千円)

(六口) 前田宗寿。(四口) 山田哲
郎、堀内拓三。(二口) 星勝雄、百
瀬寿雄、中沢仁、浅利欣吉、岡本龍
行、田口憲司、豊島義明、原田武
司、重村清、横山八郎。(一口) 月
原俊二、佐々木民秀、子吉格郎、名
越礼子。

〔累計一、九三一・一二口。八五一
名。金額九、六五五、六〇〇円〕

ネパールヒマラヤのほぼ中央、マナ
スル三山の南端に聳えるヒマルチュリ
は一九六〇年春、慶応大学隊によって
西面ムシ・コーラより初登頂された。

その後数々の隊が東面、南面と挑んで
きたが南稜からのルートは難ルートと
して未踏のまま残されてきていた。一
九八一年秋、日本大学隊は同ルートよ
り挑戦。しかし厳しい自然現象に阻ま
れて七六〇〇で断念。しかし「南稜
からヒマルチュリへ」という夢はその
後も確実にふくらみ続け、一九八六年
夏、再度、登攀計画が実現した。捲土
重来とも言うべきこの七名からなる隊
は六〇日間にわたり粘り強くルートを

●今西総隊長より

編集宛 (五月二日落筆分)

十四日、ネパールでの表敬訪問を
終え、国境を越えて二十日、北側ベ
イス・キャンプに入りました。快調
です。隊員は只今、休養中で、二十
三日頃から最終段階に入ります。
昨夜は満天の星が輝き奇れいでし
た。

(四月二十一日、北側ベースにて)

伸ばし、ようやく十月二十六日、三名
の隊員と一名のシェルパが頂上に立つ
ことが出来た。輝かしい南稜よりの初
登攀であった。しかし下山途中隊員一
名が南稜より滑落死する。栄光は一挙
に悲劇に転じたのである。

記述はルートの困難さ、隊員の気魄
などをよく伝えているが、その基調は
「登山は先人の肩にのってすすむもの
だ」(ハント)という、この山にかけ
た大学の先輩諸氏に対する感謝の気持
ちである。あわせて本書は事故報告書
にもなっていて、行間よりにじみ出る
レクイエムの響きはいつものことなが
ら遭難というものの悲惨さを思わせず
にはおかない。

一九八七年八月刊 B5版 一〇二
ページ 日本大学山岳部 桜門山岳
会

『東京農業大学 中国崑崙山脈七二六
七m峰登山隊 一九八六』

かつて今西錦司は崑崙への熱き思い
を「聖地巡礼の胸をゆさぶる一種のあ
こがれ」と言った。崑崙の名は「書
経」に現われ、山名としては世界最古
のものと思われる。長い歴史の中で崑
崙への思いは強まり、コンロンという
響きは無限の夢をわれわれの前に展げ
てくれている。

そうした崑崙山脈は長い間、閉され

ていた。ようやく一九八五年になって
門戸が開かれ、米国・中国合同隊のウ
ルグ・ムスターグ(六九七三登頂)、
H A J・中国合同隊の慕士山(六六三
八登頂)、日本山岳会隊のカカサイジ
モンカ(六一七八登頂)などが入山
した。だが広大な崑崙山脈には未知の
部分も多く、最高峰の無名峰(七一六
七m)は未踏のまま残されていた。

報告書はこの未踏の最高峰に登山隊
全員が無事故のうちに初登頂出来たよ
ろこびを伝えている。登山隊日誌も要
領よくまとめられていて、遠征の全
容、氷河横断の苦勞などがよく理解出
来る。写真も美しく、きれいな出来映
えの本となっている。だが崑崙山脈の
魅力がその垂直指向あるいはアルピニ
ズムの面ではなく、むしろ水平指向の
面にあるとするなら、未知、未踏の地
域に分け入り、探索し登頂した登山隊
の報告書としては、もう少し辺境につ
いての人文、地文的な報告が欲しかっ
たような気がする。

一九八八年一月刊 変型B5版 八
ページ 東京農業大学農友会山岳部
東京農業大学山岳会

陽光讃歌

神谷平吉 著

(田中純夫)



三水会・二百回例会記念で

陣馬山山行

三水会も、昭和五十年五月に発足以来、五十八年二月に百回例会を数え、六十年には創立十周年祝賀会を持ち、今年二月には、二百回例会を迎えるに至った。

その一つの節目を祝う懇親山行が企画され、去る四月十日、陣馬山がところとなった。

陣馬高原下からの車道は、三日前の降雪で、車のわだちが残り、和田峠から山頂までは、雪を踏んでの登りとなった。

山頂では先行した係が、とん汁をつくって、一行の到着を待っている。早速にワインで乾盃。今日ばかりは、讃酔会と名を変えて、二百回例会記念を心ゆくまで、腹の中から祝ったものだった。

栃谷に下って一浴という案もあったが、茶屋主人のすすめで、直接、落合から藤野に下山。

二年後の創立十五周年、さらには

三百回例会に向って、着実な歩みを続け、その節目を大切にしながら、息の長い三水会でありたいというのが、みんなの願いではないだろうか。それをひしひしと、肌で感じたのは私だけではあるまい。

参加者 荒木夫妻、荒野、石橋、乾、岡野、片岡、川上、川俣、北島、木村、斉藤(健)、坂倉、柴田、須藤、高田、滝沢、鶴岡、遠田夫妻、沼倉、原、平井、平野、広羽、村川、横溝、渡辺(道)、係岩堀、原、平戸。

(高田真哉)

日本山岳画協会

88年度展

本年度展を新装2階に移った朝日アートギャラリーにて開催いたします。会員18名。

○7月9日(土)～15日(金)

11:00～18:30

(日曜、最終17:00)

○朝日アートギャラリー

JR有楽町/地下鉄丸ノ内線

銀座C4出口

中央区銀座4～100

(朝日旅行センタ隣2F)

電・567・0671

山は、たとえそれがどんな小さな山であっても、また何時どんなルートから登ったにしても、必ずと言っていい程、其処に何かしら心惹かれる自然の巧まざる美の幾つかを発見することが出来る。

このように、筆者(会員)は、この本の中に書いている。永い間の山歩きをとおして、心の中に刻まれた数々の山、特に九州は九重連峰、そして阿蘇山。何回登っても、違った幾重もの印象が残る。良かったという筆者の心の中には、いつも郷里の山の良さが刻まれている。

この本は筆者が還暦を迎えられて、熟年への節目に、限られた方への贈呈書として発刊されたものであるが、これまで地元誌に掲載されたものを集めた山の随筆集である。筆者は昭和三十六年に郷里熊本市で開業、内科、小児科の専門医である。還暦を迎え、何か自分自身の記念になるようにと出版を思い立たれたが、好きな山の外にも、八ミリ、天文など趣味に関するもの、開業医としての診療余録、ロータリーに関するものなど幅広い集録となっている。陽光讃歌とは昭和五十三年十一月十三日から十八日まで熊日夕刊に連載された山の随筆の題名を取られている。

東京在住中、初めて常念岳、蝶ヶ岳

を越えて奥上高地へ下り、更に梓川沿いに大正池までの山行を試みた、その時が初めての日本アルプスへの出会いであった筆者が、昭和三十六年、郷里熊本に帰り、開業医という職業柄、遠山の山行は出来ない、専ら九州各地の山歩きが始まった。とかく九州の山は甘くみられがちだが、冬山に叫ける白銀の往生・杵島岳(阿蘇)、霧氷の雲仙岳、春はミヤマキリシマ、秋はスキの原に紅葉の山(九重など)、筆者の克明な描写の中に九州の山を紹介、そして自然の厳しさを教えてくれる。

一九八八年一月一日刊、二七一ページ、非売品

(西沢健一)

一等三角点の山を歩く

山口ゆき子・横山隆・高柳生
雄・川越はじめ・岡村美邦著

本書は、東北、関東、甲信越、東海各地方から抽出した一等点と補点の山七十七座に、宮ノ浦岳と北海道旭岳を加えた案内書である。案内書のパターンは色々だが、本書は魅力的な一等点と補点としたところで先ず成功といえるし、地域の広さも山の数も一冊として格好と言えよう。

一つの山に就いて数種のコースを書

桑原さん追想

藤 平 正 夫

桑原さんが東北大学から京都に帰ってこられたところ、私は福井に住んでいた。ちょうどマナスル計画を日本山岳会にうつすとかでかしましく、福井まで新進気鋭の学者、桑原さんの言葉がきこえてきたものである。

若い者は今西錦司のように全人生を登山と探険にうちこめ。めめしく生活のことなど考える奴は、エキस्पедиションを語る資格はないなどと激烈な言動ばかりつたわってきた。

いっばしの社会人のつもりの私は、学者のたわごとと反発を先に感じたものである。

ところがチヨゴリザの話がもちあがり、決算日の夜、残業をしている私のところへ今西寿雄さんが突然あらわれ、どうしても隊員になってくれとの強談判である。一応考慮を約したが、肚はもうきまっていた。翌月には桑原さん自らでこれられ、寿雄さんと三人で虎の門あたりの食堂で、ライスカレーなんかおいながら話した。これが初対面だったとおもう。

先入感と全くちがつて温和で寛厚、明るくはなしやすい人であった。この方を隊長のエキस्पедиションに大いに魅力をいだかされ応諾の返事をした。

あれから三十年間、毎年何回か必ずあうことができた。いつまでもかわらない人柄で、私らのような無遠慮な連中をよくかわいがっていたものである。

昨年十二月には文化勲章受章パーティ、本年一月七日には京大学士山岳会の新年宴会、つづいて三月一日、梅

棹忠夫さんの朝日賞受賞パーティとこのところ三回もあうことができた。ひとところ健康がすぐれなかったが、すっかり元気になられ、三月一日のパーティのおりには、チヨゴリザ三十周年(本年八月四日)をどうするのだと氣にかけておられた。

虫がしらせたのかもしれない。

追 悼 谷 博 さん

四手井 靖 彦

谷さんの家は、京都から大きな峠を三つ越えた、丹波の由良川の近くにある。白壁の蔵と、どっしりとした萱ぶき。代々の医家である。最初に訪れたのは中学へ入った春であった。頭巾山でシテムボーゲンを買った。もう、四十年も昔の話である。もちろん、学生のころ、先鋭的なクライマーとして槍・穂高で活躍されたことや、白頭山の遠征に参加されたことは、ずっとあとになって知った。

谷さんの期待にそむいて、山登りの優等生になることはできなかったが、丹波へはせせせと通った。春にはワラビやたけのこ、夏は鮎、秋にはマツタケや栗。田舎に親戚のない私にとって、丹波は「ふるさと」であった。

谷さんは脳溢血で最初に倒れてから十八年間の闘病生活であったという。枕を頼り、やがて車いすになり、最後は寝たきりの生活になった。しかし、みずみずしい青年のような感性を決して失うことはなかった。山と自然への憧れが絶えることはなかった。人が集まると、車いすを積んでピクニックへ出掛けた。奈良井川に放流したアマゴのことをいつも気にし、「よくなったら穂高を見

く方法もあるが、ページ数の都合もあるし散漫になる惧れもある。本書では一山一コースに絞り、その代り行動記録が精密を極めている。その記録は殆んど全部がここ一、二年間のもので、本書を出すために特に登ったことが判かる。従って各篇共記述が澁澁としていて、あまり山の情感などに捉われず、それが却って案内書らしい形になっている(もちろん山の概説や草花などに就いて述べた篇もあるが)。

各篇に、記述コースだけのイラストと、これ亦詳細なコースタイムが入っていて、忠実に読むとその行動が読む側に伝わってくる。言い変えれば、このコースには絶対責任を持つ、という案内内である。

書き方の一例をあげると、「木曽御嶽山」の「今回は車で中央道を突っ走り、土砂降りの権兵衛峠を越え福島で仮泊、翌朝王滝」という具合で勢いがある。この気分は他の篇にも見られるし、中央道も権兵衛峠も開けて間もないから、一層清新である。

「本書掲載一重点略図」も地元連絡(宿、タクシー他)も要を得ていて案内書として推し得る。この地域に残る一重点に付いての続刊を期待したい。

一九八八年二月 新ハイキング社刊
一六〇〇円

(川崎精雄)

に行く」と宣言しておられた。スイスへ行くことも諦めてはいなかった。リュックを担いで、門口に立たれたこともあった。新しい寝袋を買って、はしゃいでおられた。山の文献にもよく目を通し、自身で読めなくなつてからは、奥さんの千代野さんがベッドのそばで朗読しておられた。子どもがなかった谷さんは、若い人たちにわけへだてなく接し、情熱をこめて山を語った。

一昨年秋、芦生・演習林の支部集會に車いすで参加された。今西錦司元会長と焚火のそばで談笑している一枚の写真がある。これが谷さんが戸外へ出た最後になった。告別式は、暖冬には珍しい大雪になった。家並みも野辺も白一色に包まれた。生家を出る棺は、遺言により、山岳会の会員たちにしっかりと支えられていた。

茶谷先輩を偲ぶ

岡村治信

いつもお元気いっぱいの茶谷先輩にこんなに早くお別れしようとは、全く予想もしないことでした。

太平洋戦争の末期ごろ、私が館山海軍砲術学校に主計長として勤務中、茶谷さんがたしか海軍省経理局員として館山に出張してこられたのが最初の出会ひでした。仕事の上のおつきあいが、たいへん理知的でしかも庶民的な温かみのあるお話しぶりに、強い信頼感と人間的な魅力を感じたことをよく覚えています。

昭和三十七年の夏、梓会の再出発にあたってご案内を受け、目黒区三光町の旧水交會に出向いたところ、思いがけず茶谷さんと同席し、いろいろ山友としてのおつきあいが始まり、東京近郊の山行にしばしば一緒にまし

た。時にはご令息夫妻も参加され、仲睦まじくうるわしいご一家ぶりをほほえましく拝見し、また、なにげない會話の中からも海軍のことや山歩きや人生百般のことについていろいろ教えていただきました。

三笠保存会の事務長、のちには理事長として永いあいだ活躍され、多くのご苦労があったとも伺いましたが、つねにすべての人に親愛と謙讓のころをもつて接せられ、記念艦三笠復興の難事業を完遂されたことは特筆すべきことと思います。また、梓会の会長、さらに名誉会長として衆望を集められたのも、まさにご人徳のいたすところであり、今後ますますご活躍になるものと確信しておりました。

日本山岳会の年次晩餐會では、いつも茶谷さんと同じ席でビールを傾けながら山の話を交換するのが私の大きな楽しみでした。そのような折、梓会の創設者であり永年の恩師としての田部重治先生を賛仰し、そのすぐれた人格に傾倒される茶谷さんの表情は美しく輝いていました。昭和五十一年一月の「山と溪谷」に書かれた『田部重治の山歩きの心』と題する一文は、田部先生とともに山に学び山を恋慕い慕う真情に溢れた名文で、まことに感銘深いものがあります。

昨年の晩餐會のときには珍しくお顔が見えず、何となく気にかかっておりましたところ、年があけて間もなく、突然の訃報に接しました。もはや、あの温容をたたえた魅力的なお人柄に接することができないと思うと、まことに残念でなりません。でも、茶谷さんは依然としておおらかに明るく、あの健脚にまかせて天界の山山を踏破し、その広大壮麗な風光を心ゆくばかり楽しんでおられるのではないのでしょうか。

みたまのご静安を衷心よりお祈り申し上げます。



報告——総務委員会・集會委員会

さくらハイクの記

九八九二番・石田喜八

今年東京では桜の開花期に雪が降った。それでも花は鮮やかに咲き、街を明るくした。

四月十七日、恒例の「新入会員歓迎さくらハイク・浅間嶺山行」に参加した。車窓から公園、川岸、畔道の桜を賞でつつ武蔵五日市駅に十時集合、顔馴染の人たちと再会した。

そう云っても私も一昨年の新入会で、さくらハイクも二回目である。この間、京都集會、晩餐會、この一本展等によりクラブライフ入門過程にあり、専ら先輩の知遇に依っている。それにしても親しむほどに脈脈の深さを知る思いである。

望月達夫文庫目録(4)〔前月よりの続き〕

- ④ Alpine Journal May 1966. No.312 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1966. No.313 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1967. No.314 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1967. No.315 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1968. No.316 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1968. No.317 A.C.
 ④ Alpine Journal 1969. No.318 A.C.
 ④ Alpine Journal 1970. No.319 A.C.
 ④ Alpine Journal 1971. No.320 A.C.
 ④ Alpine Journal 1972. No.321 A.C.
 ④ Alpine Journal 1973. No.322 A.C.
 ④ Alpine Journal 1974. No.323 A.C.
 ④ Alpine Journal 1975. No.324 A.C.
 ④ Alpine Journal 1976. No.325 A.C.
 ④ Alpine Journal 1977. No.326 A.C.
 ④ Alpine Journal 1978. No.327 A.C.
 ④ Alpine Journal 1979. No.328 A.C.
 ④ Alpine Journal 1980. No.329 A.C.
 ④ Alpine Journal 1981. No.330 A.C.
 ④ Alpine Journal 1982. No.331 A.C.
 ④ Alpine Journal 1983. No.332 A.C.
 ④ Alpine Journal 1984. No.333 A.C.
 ④ Index of Alpine Journal vol.39-58 (1927-1952) A.C.
 ④ American Alpine Journal. 1970.
 ④ Anuario de Montaña Chile 山岳会年報 1960
 ④ Anuario de Montaña Chile 山岳会年報 1961
 ④ Enlarged Alpine Club Map of the Swiss & Italian Alps. (no date, 1st pub. 1888).
 ④ Baedekers-Eastern Alps. 1911, Leipzig
 ④ Baedekers-Switzerland. 1913, Leipzig
 ④ Baedekers-Southern France. 1914, Leipzig
 ④ Everest, A Guide to the Climb (折りたたみ式) 初登頂後刊
 ④ The Alpine Club. 1857-1957, Catalogue of the Centenary Exhibition, 1957. P.32
 ④ Nepal Mountaineering Club. P.18
 ④ Der Bergsteiger. Oct. 1938 (magazine)
 ④ The Geographical Journal, March 1955

- ④ Himalayan Journal vol.31 1971
 ④ Himalayan Journal vol.32 1972-73
 ④ Himalayan Journal vol.33 1973-74
 ④ Himalayan Journal vol.34 1974-75
 ④ Himalayan Journal (Golden-Jubilee 1928-1978) vol.35 1976-77-78
 ed. by S.S.Mehta, assisted. by H.Kapadia, R.E.Hawkins
 ④ Himalayan Journal vol.36 1978-79
 ④ Himalayan Journal vol.37 1979-80
 ④ Himalayan Journal vol.38 1980-81
 ④ Himalayan Journal vol.39 1981-82
 ④ Himalayan Journal vol.40 1982-83
 ④ Himalayan Journal vol.41 1983-84
 ed. by H.Kapadia
 ④ Jahrbuch des Deutschen Alpenvereins. 1957, (with map of Everest) München
 ④ Alpine Journal Nov. 1921. No.223 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1925. No.230 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1956. No.292 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1956. No.293 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1957. No.294 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1957. No.295 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1958. No.296 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1958. No.297 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1959. No.298 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1959. No.299 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1960. No.300 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1960. No.301 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1961. No.302 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1961. No.303 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1962. No.304 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1962. No.305 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1963. No.306 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1963. No.307 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1964. No.308 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1964. No.309 A.C.
 ④ Alpine Journal May 1965. No.310 A.C.
 ④ Alpine Journal Nov. 1965. No.311 A.C.

- 12 -

- 11 -

すぐ貸切バスで南秋川沿いに走り十一時前人里着。地元手造りの蒔蒔を仕入れて出発。遅かった春も漸く本調子で、いま山里は梅、連翹、蒲公英、薑、片栗、それに桜と一挙に花の季節を迎えている。

十二時過ぎ頂上へ。残念ながら九〇三の桜は見事な群生だったがまだ蕾が固かった。けれど心地よい汗のあとビールは美味で各々弁当をひろげ寛ぎの時をすごす。例の蒔蒔は大好評、私などは帰途、更に土産に買ったほどだった。昼食後、車座になり、リーダー、参加者のユーモラスな一言集があつて下りにかかる。薄曇りながら御前山が大きく、盟主雲取山も霞んでみえた。

午後四時近く全員無事下山。北秋川橋からバスの人となり桜ならぬ山の話に花を咲かせるうちに五日市駅へ戻った。これからもさくらハイクは私の年中行事になりそうである。

来年もいい山の桜を楽しみにしている。

新入会員オリエンテー

ションに参加して

一〇一九〇番・荒井紀子

日本山岳会是我的の憧れでした。日本山岳会という名を聞いたたびに胸がとき

めきました。その会員になれるとは思ってもみませんでしたので、夢のようです。

一昨年の夏、経済の実態調査のため、ネパールへ出かけたのですが、山、高きが故に尊からず、木を以て尊しとすという先人の教えに反するような実態を見て抱いたいくつかの疑問を解決するために、自然エネルギーについて、鳥居亮先生(日本山岳会会員で自然エネルギー研究家)にお訊ねしたことが機縁で、会員にしていたできました。

現在、私が入っている「がくかい」は理論計量経済学会と日本経済政策学会ですが、日本山岳会という日本最高峰の「がくかい」に入ることができて、至上の喜びに思っておりましたので、新入会員オリエンテーションの通知をいただいた時には、夢のような存在であった山岳会の会員であることを実感し、身がひきしまる思いがしました。

本部の入口で記名して、ルームへ入りましたが、登山者カードに記入して山小屋にでも入ったかのような雰囲気でした。

来たる五月に実現される三国合同登山の総隊長としてお忙しい今西会長に代わって、村木副会長から歓迎のお言葉をいただき、会の組織と活動につ

望月達夫文庫目録 (5)

- ⑨ The Geographical Journal, June 1955
- ⑩ The Geographical Journal, Sep. 1955
- ⑪ The Geographical Journal, Dec. 1955
- ⑫ The Geographical Journal, Mar. 1956
- ⑬ National Geographic Magazine Oct. 1930
- ⑭ National Geographic Magazine Sept. 1961
- ⑮ Journal No.1 1953.4 (Schweizerische Stiftung für Alpine Forschungen)
- ⑯ Journal No.2 1954.3 (S.S.A.F.)
- ⑰ Journal No.3 1954.9 (S.S.A.F.)
- ⑱ Journal No.4 1955.4 (S.S.A.F.)
- ⑲ Journal No.5 1956.5 (S.S.A.F.)
- ⑳ Journal No.6 1957.12 (S.S.A.F.)
- ㉑ Journal No.7 1959.4 (S.S.A.F.)
- ㉒ Journal No.8 1959.12 (S.S.A.F.)
- ㉓ Journal No.9 1960.12 (S.S.A.F.)
- ㉔ Journal No.10 1961.11 (S.S.A.F.)
- ㉕ Journal No.11 1962.4 (S.S.A.F.)
- ㉖ Geographical Magazine, Oct. 1953
- ㉗ The Times Supplement, July 1953

／いての説明、日本山岳会80周年記念制作のスライド上映、日・中・ネ三国友好登山についての説明、分科会、全体会、桜ハイクの案内と、二時に始まったオリエンテーションは五時近くまでつづきました。

話される方々が、口を余り開かず、声を張り上げることなく、静かな口調で訥訥と話されたことが、一層、岳人らしさを引立たせたようで、「ああ、これぞ山男」と思ったほどです。

日本各地の遠方から出席された方々も少なくなく、また、各方面において、社会的にご活躍の経験豊富な方々も、新入会員として、初心に返って熱心にお話しに耳を傾けている様子を見

て、これ以上の美しい姿はないのではないかと、心を打たれました。

ひきつづいて催された懇親会は、先輩方の暖かいお気持ちが感ぜられて、胸があつくまりました。

年令差や、職業等の違いを越えて、唯唯、言葉に表わすことのできない「山」の魅力にひきつけられた者の集まり。「山」という崇高な存在に憧れる者だけの純粋な心の集まり。それが、日本山岳会であるということが良くなりました。

そして、これほどに純粋な心を生ぜさせてくれる「山」に対して、ますます畏敬の念を深くした次第です。

-13-

・会務報告

一〇〇七五番・佐藤武雄

偶然とは、そのなるべき理由がないのに思いがけなく起る様子をいう。その意味からは冬山の怖ろしい雪崩も避けられないことはない。今回、三月十二日に行なわれた表記の会合は有意義であった。懇親会に移った時、年長なるためか、私はあいさいをさせられた。私は北海道生れで、深田久弥氏の一〇〇名山にある阿寒岳の近くにあった雄別炭鉱で育った。現在は閉山になり住む人も希である。開山当時は入る

四月理事会
四月十三日午後六時三十分
場所 本会ルーム

出席者 村木副会長、鈴木、西村、太田、大橋、新井、織田沢、岡沢、小浜口、大森、田部井、勝山各理事、田中、松田、小倉、安間、山野井、広羽、山田、沢村、大島、杉野目、日下田各評議員、太田監事

委任 今西会長、大塚副会長、松永、早坂各理事

審議事項
通常総会付議事項検討の件
五月二十日の通常総会に付議する議案

学校もなく六・メートルの山川を越えて通学したが、鉄道が懸ってから炭鉱はまたたく間に人口一万の町に変貌した。当日その頃に生れたという婦人が、私の席に近づいて来た。これが最年長の老山好きと若い婦人の出合で、場所は遠い阿寒で育った者と、生れた者の面会であった。然かも東京の山岳会の本部である。そして私共は入会を喜び将来の発展を約して別れた。真の偶然とはこう言うものであろうか。

につき、検討し承認した。

監査報告 四月十一日、当期の監査を行なった結果、正確かつ妥当である旨の説明があった。

報告事項
三月二十一日開催された横浜ウエストン祭は雨にもかかわらず八十名の参加者があり盛会だった。

●三国登山 五月五日登頂を前提に記者会見を予定、今回の登山は隊の動きと同時に報道が進み、対応のための時間がとれない。

三月三十一日現在の募金状況は四六、一九〇、七五二円

四月十日、今西会長日本発。四月十一日、大塚副会長日本発。六月三日、登頂祝賀会(北京)。六月十七日、登頂祝賀会(東京)

● 婦人 三月二十三日、インドヒマラヤ・シバ峰偵察報告会。四月十六、十八日、シバ峰隊富士山合宿。シバ峰隊の今後の予定 七月二十日、先発隊出発。七月二十四日、本隊出発、八月二十四日、帰国。

● 山岳編集 目次作成途中、原稿依頼中。

● 総務 三月十二日、オリエンテーション。新入会員四十九名参加。理事会用報告用紙及び各集会用参加者名簿用紙作成を予定。四月十七日、新入会員歓迎サクラハイク、浅間嶺にて。

● 図書 三月十九日、山岳史懇談会

● 山研 開所を道路事情で四月二十四日から四月二十九日に変更。

● フィルム ビデオ「マナスルに立つ」バルセロナ山岳会に貸し出し。六月七日、塚本福治郎氏講演会。

● 科学 四月十六日「危険な動物と安全登山」講演会

● 会報 会のいろいろな集会の参加者名はできるだけ掲載して行きたい。

●集会 四月二十四日、黒姫山現地小集会。五月十四、十五日、若葉会山行吾妻山

●海外 六月四日、アダムス・カーター講演会。六月二十八日「ジャワの登山」講演会。七月十二日、冬季アンナプルナ主峰登山映画会。九月七日、南極の基地あれこれ、講演・村山雅美。●村木副会長 四月十六日、山陰支部総会に出席。



(4月)



☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

●戸隠修験道の

講演会と探索山行

恒例の探索山行、今年度は山岳宗教のメッカ戸隠に出かけ、九頭竜信仰など探って見たいと思います。

このため、左記のように、先ず来る七月一日(金)の夜、ルームで講演会を開きます。続いて七月十六日(土)

7日	婦人懇談会
8日	常務理事会・常任評議員会
11日	監査
13日	理事会・評議員会
14日	学生部総会
15日	科学委員会談話会
16日	シンポジウム「危険な動物と安全登山」
18日	図書委員会
20日	三水会、山研委員会
21日	資料委員会
25日	フィルム委員会、婦人懇談会
26日	自然保護委員会
28日	会報編集委員会

会員異動 4月		4月来室者468名
物故		
浅原重継(一四二四)	87・12・6	
桑原武夫(四六四一)	4・10	
小池文雄(一〇八四)	88・2・28	
水腰英隆(八六五二)	4・21	
海外在住休会		
久下啓子(八八一九)		
退会		
手島俊雄(一〇〇一九)		

戸隠の中社宿坊に泊り、現地で戸隠神領と頭光寺との関係など古文書を拝見しながら伺います。翌十七日(日)は奥社に詣でた後、二班に分かれ、それぞれ表山縦走と戸隠高原の散策を行なう予定です。奮ってご参加下さい。	◎講演会 日時 昭和六十三年七月一日(金)午後六時半 場所 日本山岳会ルーム 講師 武蔵大学教授 宮本製義雄 題目 戸隠修験道 ◎探索山行 集合 昭和六十三年七月十六日(土)午後四時半二沢旅館(戸隠中社宿坊)
---	--

講演 九頭竜信仰の話 長野高専教授 二沢久昭氏。懇親会、宿坊泊	探索山行 七月十七日(日) A班 奥社―八方峯―表山―不動―牧場バス停 B班 奥社―森林公園―中社―宝光社―バス停 (解散はバス停午後四時頃) 探索山行参加費 八千円(一泊三食、保険料等)、非会員八千五百円、現地徴収(参加取消二千円) 申込 昭和六十三年七月一日(金)まで日本山岳会科学研究委員会宛 ※探索山行の詳細については後刻、参加申込者に連絡します。
---------------------------------	--

編集後記 今月の「海外の山」欄を読んで頂くと分かるが、フランスでは、次々と新しい登山(?)の形が作り出されているらしい。	▼その一つにパラグライダーと呼ばれる下山方法がある。	▼「パラグライダーは危険だ」と、自重をうながす特集記事が、SAC(スイス山岳会)会報に載ったのは数年前だった。	▼結局、パラグライダー愛好者の急増を抑えきれず、つい最近のSAC会報には水際作戦とでもいうべきお知らせが載った。	▼有資格者のパラシューティストの講習を受けてから、パラグライダーをやるように、というものである。	▼スリルを求める若者がやがてアイガーの頂上からスカイダイビングをと、考えはしないかと恐怖を覚えた。(O)
昭和六十三年六月二十日発行 102 東京都千代田区四番町五一四 サンビュウハイッ四番町	発行所 日本山岳会 法人 日本山岳会 発行所 今西寿雄 編集代表 岡沢祐吉 電話 東京(21)四四三三 振替口座 東京三一四八二九番 東京都港区赤坂一―三―六 赤坂グレイスビル	印刷所 株式会社 技報堂			